

## 【書評】

### 塩尻和子編著『リビアを知るための 60 章』【第 2 版】

(エリア・スタディーズ 59)

明石書店 2020 年 3 月刊

四六判 382 頁 2000 円+税

松山大学准教授 岩崎 真紀

#### 1. 第 2 版出版の背景——「アラブの春」とリビア

塩尻和子編著『リビアを知るための 60 章』【第 2 版】(明石書店、2020 年) は、同名の初版(2006 年)を大幅に改稿して出版されたリビア入門書である。編著者の塩尻氏は、夫の塩尻宏氏が駐リビア特命全権大使として 2003 年 6 月から 2006 年 3 月までの 2 年 9 か月のあいだ首都トリポリに駐在したことを機に、この期間、毎年通算約 3 カ月トリポリに滞在し、現地調査を実施した。この成果をまとめたものが、本書初版である。

初版出版から 5 年が経った 2011 年、リビアは大きな転換期を迎えた。同年 10 月 20 日、最高指導者ムアンマル・カッザーフィー(カダフィー<sup>1</sup>) (1942-2011) がこの世を去ったのである。2010 年末にチュニジアではじまり、瞬く間にアラブ諸国に広まった「アラブの春<sup>2</sup>」と呼ばれる民衆の反体制運動は、リビアの民衆のあいだでも支持された。カッザーフィーはその渦中、自国民によって殺害された。

本書第 2 版は、それから約 9 年後の 2020 年 3 月に出版された。編者は「アラブの春」によりリビア社会が大きく変化する姿を目の当たりにし、すぐに第 2 版の出版を考えたという。しかし、内戦化したリビアの最新情報を得ることは容易ではなく、出版にいたるまでには 9 年の歳月を要した。初版は塩尻氏の単著であったのに対し、本書では氏は編著者となり、より広く情報を収集するため、新たにつきの 6 名が共著者として迎え入れられた。塩尻宏氏(外交官)、上山一氏、田中友紀氏(いずれも現代リビア研究者)、アメッド・ナイリ氏(外交官)、インティサール・ラジャバーニ氏(国際機関職員)、ハーテム・ムスタファ・ムフターフ氏(工学者、政治家)で、後半の 3 名はリビア人である(肩書はいずれも本書出版時)。

#### 2. 各部の概要

本書は 9 部、60 章、23 のコラムから成り、リビア略史、新生リビア政権の系譜(図解)等が所収されている。第 I 部では、リビアの地理、歴史、民族が紹介される。第 II 部では「アラブの春」とその結果としてのカッザーフィーの死が論じられたのち、カッザーフィーの生涯が紐解かれる。

第III部では、リビアと欧米諸国や日本との国家間関係が論じられる。7年間つづいた国連制裁が解除されたのち、2003年にリビアが公式に国際社会復帰を宣言したこと、欧米諸国や日本の人々がリビア人との関係構築に向けて奮闘する様子も描かれる。第IV部では、リビアがアフリカの盟主を目指したことで増加した移民や難民の増加をめぐる問題が論じられる。第V部では一転してリビアの社会や教育制度、女性の社会進出など、市井の人々の生活に関わる事柄が編者の豊かな現地体験をもとに詳細に論じられる。第VI部ではリビアが有する天然資源や日本との関係に焦点があてられる。第VII部から第IX部までは、2011年から2019年末までの約10年のあいだに起きた民衆蜂起、独裁政権の崩壊、新生リビアの誕生と混乱が時系列で論じられる。とくに第IX部では、トルコやカタールの支援をうけるイスラーム主義勢力から構成される旧国民議会（トリポリ政府）と、リベラル派勢力と連邦主義者から構成される代表議会（トブルク政府）という2つの政府が1つの国の中に生じる混沌とした状況がつぶさに描かれている。なお、2019年末までに実施すると発表されていた議会選挙と大統領選挙は、本書が出版された2020年3月時点でも実現されていなかつたが、後述するように、その状況は2021年に入り、大きく進展した。

### 3. 本書の学術的意義

おそらく本書はリビアについて論じた邦文文献としては類書をみないものであり、極めて貴重な文献である。近年でこそ中東研究者の数は増えつつあるが、そのなかでリビアを専門とする研究者はまだ数えるほどである。そのため、管見の限りリビアを専門とした邦文文献は少なく、とくに現代リビアの状況を論じた文献は、本書と本書で紹介された参考文献以外にはあまり存在しない。その結果、日本の一般の人々がリビアの情報を得ようと思った場合、マスメディアによる報道にも依拠せざるを得ないわけだが、こちらに関しても日本ではリビアに焦点をあてた報道は少なく、あったとしても近年ではテロや内戦を論じる報道が多くを占める。その結果、人々の頭のなかにはリビアに対する危険なイメージばかりが増幅される。評者が教鞭を執る大学でも、「中東＝危険な場所」というイメージしか持たない学生は非常に多い。このようにバイアスがかかった状況のなかで、リビアの豊かな歴史や文化、「誠実で大人しい」(81頁)、「心の優しさを失わない人々」(360頁)のことを、現地体験や多くの写真を交えて分かりやすく伝える本書は、リビアに対する最良の入門書である。

他方で、本書は専門的な内容にも踏み込んでいる。明石書店の「エリア・スタディーズ」シリーズは一般書に位置づけられているが、カッザーフィー政権崩壊後の刻々と変遷する国内政治や国際関係についての記述は、中東を専門とする研究者にとっても読みごたえのある内容である。巻末の「新生リビア政権の系譜」(372-373頁)は政権崩壊後の複雑な政治組織の流れや関係性が分かりやすく図式化されているが、これは専門的知識を持ち、優れた伝達力を持つからこそ可能となったものであると考える。

本書はエスノグラフィーとしても一定の価値があると思料する。リビアに関しては邦文文献が少ないだけでなく、内戦状態にある現在はもちろん、カッザーフィー政権下でも日本人が簡単に入国できる国ではなかった。実際、エジプト研究者である評者は、編者に研究指導を仰いでいた大学院生のときに、編著者ご夫妻のお招きでリビアに渡航したことがあるが、事前の手続きはこれまで訪問した 20 カ国以上の国々のなかでも群を抜いて煩雑で、時間もかかった。中東研究者にとってすら渡航からして困難な国であるため、一般の日本人が現地を訪れ、市井の人々の生活習慣や社会のありようを知ることは容易ではない。したがって、本書に描かれた現代リビアの人々の宗教実践、食文化、教育制度、女性の活躍、そして、外交の裏側に関する描写は、貴重な一次資料としての意味も持っているといえるだろう。

最後に形式に関して若干の課題を指摘したい。本書は現在の内容でも十分満足がいくものだが、カッザーフィー政権崩壊については、第II部と第VII部の一部が類似した内容だったため、第II部はカッザーフィーの生き立ちや思想に、第VII部は政権崩壊に、それぞれ特化すれば、読者はよりスマートに読み進められたのではないかと感じた。しかしながら、この指摘は本書のすばらしさを否定するものではない。

#### 4. むすびにかえて

「アラブの春」後の中東諸国の中でもリビアが極めて過酷な状況にあることは知っていたが、本書を読み、それが想像していたよりもさらに厳しく、複雑であることを知り、愕然とした。その一方で、かつて目にした青空のもとに広がる穏やかなトリポリの街並みが頭のなかいっぱいに広がり、懐かしく、温かな気持ちにもなった。また、2021 年に入り、明るい兆しもみえてきた。リビアでは「アラブの春」以降、長らく政府が東西に分かれ対立する状況がつづいていたが、ようやく 2021 年 3 月 10 日、暫定統一政府が承認されたのである<sup>3</sup>。また、大統領選と議会選挙も同年 12 月に実施が予定されている。人々が安心して暮らせるよう、1 日も早くリビアに平和が訪れることが強く願う。

※本稿は、以下の書評を大幅に改稿したものである。

岩崎真紀「塩尻和子編著『リビアを知るための 60 章』【第 2 版】（エリア・スタディーズ 59）（明石書店、2020 年）」『一神教学際研究』16 号、2021 年、111-117 頁。

<sup>1</sup> 本稿で使用するアラビア語表記は、本書同様、原則として正則アラビア語の発音に近いカタカナ表記を用いる。新聞等で一般的に採用されている発音表記と異なる語に関しては、初出の際に丸括弧のなかに一般的な発音を併記する。例：カッザーフィー（カダフィー）

<sup>2</sup> 「アラブの春」という語には注意が必要である。2010 年末以降の中東諸国における民衆運動に対して欧米のメディアがつけたこの名称は、アラブ諸国のメディアでも使われているが、中東出身者を中心に、実際には反発を覚える人も多い。なぜなら、現実は「春」が意味する穏やかな変動ではなかったこと、また、独裁体制から

---

民主化へという欧米諸国が定めた1つの基準でしか事態をみていないが実際には様々な集団からの多様な要求が含まれていたことがその理由として挙げられる（長沢栄治「中東近代史のもう1つの見方—アラブ革命の5年間を振り返って」後藤晃・長沢栄治編著『現代中東を読み解く：アラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店、2016年、29-31頁）。筆者が知る多くの中東出身も「アラブの春」を用いず、代わりに「革命」を意味する「サウラ, thawra」というアラビア語を用いる。本書では「アラブの春」という名称についての説明はとくにないが、初出の際に「いわゆる『アラブの春』」（3頁）とされており、その後も一貫して括弧つきの表記がなされている。このことから、著者たちは「アラブの春」という名称を無批判に用いているわけではないことが伺える。

<sup>3</sup> Al Jazeera “Libyan lawmakers approve gov’t of PM-designate Dbeibah”, 2021年3月10日 (<https://www.aljazeera.com/news/2021/3/10/libyan-lawmakers-endorse-govt-of-pm-designate-dbeibah>, 2021年5月18日最終確認)。